

懐奏曲の楽しみ

II

2001年 10月20日(土) 7時開演

岡山シンフォニーホール

主催 ● ミフネ歯科医院

マネジメント ● 大阪アーティスト協会

心から心へ……



感謝のことば

今日の演奏会は多くのご縁に支えられて、開催できる運びとなりました。

演奏を快諾して下さった（しかも2曲も）久保陽子先生、指揮の菊池 東さん、コンサートマスターの佐藤真理子さん始め、倉敷管弦楽団の皆さん、台北からかけつけてくれた弟の嫁の蔡佩真（エミー）さん、ピアノの調律、調整に最大限の力を出して下さった土居孝司さん、タイトル字を揮毫して下さった三浦 晰先生、病院の15年来のスタッフの坂口和子さん、上岡実代子さん、忙しい中曲作りのアドバイスをして下さった藤原真理さん、何回も練習につき合っ下さり、励まして下さったり、おしりに火をつけまわられたりして下さった、大阪音大教授の佐藤价子先生、忍耐強く協力してくれた家族、そして今回わざわざ足を運んで下さった皆様に心よりお礼申し上げます。

三 船 文 彰



台北「李登輝ご夫妻にささげる音楽会」の時に
左から 久保陽子、蔡佩真、三船文彰

PROGRAM

ラフマニノフ ◆ パガニーニの主題による狂詩曲 作品43 (1934)

Rachmaninov Rhapsody on a theme of Paganini op.43

ピアノ：蔡佩真

(使用楽器 1926年製 スタインウェイ)

サン=サーンス ◆ チェロ協奏曲 第1番 イ短調 作品33 (1873)

Saint-Saëns Cello Concerto in A minor op.33

チェロ：三船文彰

(使用楽器 伏木三郎作 2001年9月20日完成)

—— 休 憩 (20分) ——

サン=サーンス ◆ ヴァイオリン協奏曲 第3番 ロ短調 作品61 (1880)

Saint-Saëns Violin Concerto NO.3 in B minor op.61

第1楽章 アレグロ・ノン・トロッポ

第2楽章 アンダンティーノ・クワジ・アレグレット

第3楽章 モルト・モデラート・エ・マエストーソーアレグロ・ノン・トロッポ

ヴァイオリン：久保陽子

(使用楽器 アントニオ・ストラディヴァリウス〈マダム・デカミレ〉)

サン=サーンス ◆ 序奏とロンド・カプリチオーソ 作品28 (1870)

Saint-Saëns Introduction et Rondo Capriccioso op.28

ヴァイオリン：久保陽子

(使用楽器 ガルネリ・デル・ジェス)

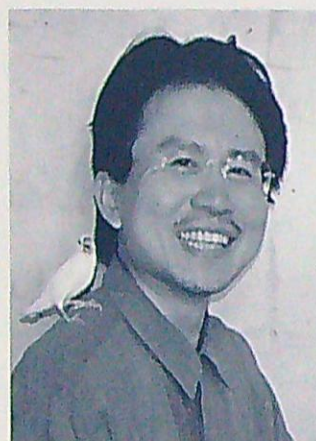


蔡佩真●ピアノ

Amy Pei-Chen Tsai, Piano

台湾台北市生まれ。幼少よりピアノに優れた才能を示し、4才の時に公開演奏を行った。

10代でアメリカに渡り、ジュリアード音楽院及び大学院にて、ジョン・ペリー、マリー・モリス、ベンジャミン・ウィッテン、マーティン・カニングなどの名教師に師事。フィラデルフィア交響楽団協奏曲コンクール、ペンシルバニアコンクールなどで優勝して頭角をあらわし、アスペン音楽祭などにも出演。1990年台北に帰国し、リサイタル、室内楽、協奏曲で盛んな演奏活動を展開する一方、多くの音楽学校で後進の指導にも力を注いでいる。



三船文彰●チェロ

Bunsho Mifune, Cello

台湾台南県生まれ。県立岡山朝日高等学校を経て、国立台湾大学歯学部卒業。岡山大学歯学部口腔外科にて助手をつとめた後、開業医となり今日に至る。

幼少の頃父からヴァイオリンの手ほどきを受け、14才の時チェロに転向。西田毅雄氏に指導を受ける。16才の時、岩崎 洗氏に連れられ、斉藤秀雄氏に入門し、師の最後の弟子となる。その後藤原真理氏にもレッスンを受ける。山陽音楽コンクール、台湾全国音楽コンクール室内楽部門第1位受賞。大学在学中より多数の演奏会を開催、台湾大学オーケストラと数回台湾一周巡回演奏会などで協奏曲を協演。

現在は診療のかたわら、独奏、室内楽など幅広く演奏活動を行い「チェロの楽しみ」リサイタルシリーズや97年シンフォニーホールでラロのチェロ協奏曲を独奏するなど楽歴を重ねる一方、特に学校、病院、

施設などでチェロ音楽による交流に力を注いでいる。また数年前から一流の演奏家を招いて、一期一会のコンサートをも多数プロデュースし、音楽と人間の純粋な関係を追求しつづけている。

今年の9月弘中 孝、久保陽子氏と台北にて、ブラームスのピアノ五重奏曲を演奏。その間に、久保陽子、蔡佩真とともに前總統李登輝ご夫妻にささげる音楽会で演奏し、音楽の持つ力に認識を新たにした。



久保陽子●ヴァイオリン

Yoko Kubo, Violin

3才より父にヴァイオリンの手ほどきを受け、その後、村山信吉、ジャンヌ・イスナールおよび斎藤秀雄に師事。1962年桐朋学園高校を卒業し、同年、チャイコフスキー国際コンクール第3位に入賞し注目を集めた。翌年フランス政府給費留学生としてパリに留学、ルネ・ベネデッティ、ジョゼフ・カルベに師事。1964年バガニーニ国際コンクール第2位、1965年にはロン＝ティボー国際コンクール第2位に入賞し、1967年からスイスにてヨーゼフ・シゲティに師事。その後、クルチ国際コンクール第1位に入賞し、1972年に帰国後は、ソリストとしてリサイタル及びオーケストラと協演し高い評価を得ている。一方室内楽の分野でも「桐五重奏団」を結成し、1974年民音室内楽コンクール第2位、斎藤秀雄賞を受賞。

1994年6月より「ジャパン・ストリング・クワルテット」を久合田 緑、菅沼準二、岩崎 洗と結成。近年バッハとバガニーニの無伴奏ヴァイオリンによるリサイタルシリーズが注目されている。現在、東京音楽大学教授。また大垣音楽祭のディレクターとして企画立案に手腕を発揮している。



菊池 東●指揮

To Kikuchi, Conductor

1948年玉島に生まれ、5才の時よりヴァイオリンを始める。

在学中、広島大学室内合奏団の指揮者としてクラブ活動を続けるかわら広島交響楽団の団員として活躍。

広島大学工学部卒業後、上京し東京都民交響楽団のサブコンサートマスター、モーツァルト室内管弦楽団のコンサートマスター等を経験し1973年帰岡。

1974年、仲間と共に倉敷室内管弦楽団（現倉敷管弦楽団）を創立。以来現在まで27年間にわたり同楽団の常任指揮者として、倉敷を中心に岡山・新見・高梁・総社・日生・瀬戸・真庭・坂出など各地で演奏会を開催している。

倉敷音楽祭においてはオーケストラ110名合唱320名からなるショスタコーヴィッチのオラトリオ「森の歌」、ヘンデルのオラトリオ「メサイア」、ミュージカル等を指揮。後楽園開園300年イベントで、後楽園内にて4600名の観客を集め、名月観賞演奏会を行う。

又、ヴァイオリン、ヴィオラ奏者としてリサイタルの他、倉敷音楽協会、玉島蔵の中コンサート等の演奏会でソロ・室内楽の演奏活動も続けている。

倉敷管弦楽団

Kurashiki-Orchestra

「美しい音色とよいアンサンブルで質の高い演奏を」を合い言葉に1974年設立。1982年岡山県文化功労賞、1985年倉敷市文化連盟賞を受賞。

演奏曲はバロックから現代曲まで幅広く、團 伊玖磨氏作曲「管弦楽のための高梁川」小六禮次郎氏作曲「瀬戸内讃歌」を初演。オペラでは「魔笛」、「フィガロの結婚」、「コシ・ファン・トゥッテ」、「カルメン」、「こうもり」、「ヘンゼルとグレーテル」、「蝶々夫人」等を演奏。

創立10周年記念演奏会では400名から成る第九演奏会、15周年では「三枝成彰with倉敷管弦楽団スーパー・ドリーム・ジョイントコンサート」、20周年ではイヴリー・ギトリス氏、岩崎 洗氏との「コンチェルトの夕べ」を開催。倉敷音楽祭へも毎年のように出演し、ミュージカル「11匹のネコ」、ヘンデル「メサイア」、ブッチーニ「ラ・ボエーム」その他を演奏。今年末には21世紀の最初を飾って、ベートーヴェンの「第九」来年3月にはオペラ「夕鶴」を演奏予定。



今日の演奏曲目の共通のテーマはロマンチズム——ロマンチックな抒情と情熱——である。

ラフマニノフとサン=サーンスの組み合わせに意外性を感じるかもしれないが、二人とも天才的なヴィルトゥオーゾピアニスト(サン=サーンスなどは11才で公開演奏会を開いたくらい早熟な神童だった)として、一世を風靡しただけでなく、作曲家としてロシアとフランスのそれぞれの音楽史上に大きな足跡を残し、そしてなによりも、保守的と同時代の批評家に酷評されながらも、頑なに自分のロマン的作風を貫き通した点で、似すぎるくらいだ。

セルゲイ・ラフマニノフ(1873~1943)は早くから超絶技巧ピアニストとしての名声を博し、作曲家として、管弦楽、室内楽、声楽などの分野にも数々のすぐれた作品を残している。しかし、やはり彼の傑作はピアノ曲に多く、「24の前奏曲」とピアノ協奏曲(特に第2、第3番)が最も有名である。**バガニーニの主題による狂詩曲**は、彼が1917年のロシア革命でアメリカに渡り、10数年のブランクの後、1934年(61才)の夏、スイスのルツェル湖畔で1カ月余りで書き上げられた。

狂詩曲と言っても実際はバガニーニの「無伴奏カプリース」作品1の第24曲を主題として、24回の変奏をほどこした変奏曲で、第7変奏から現れるグレゴリオ聖歌「ディエス・イレ(怒りの日)」の曲想や超有名な第18変奏(アンダンテ・カンタービレ)の旋律を聞いてラフマニノフのイメージと作曲の才能に感嘆しない者はいないだろう。もちろん技巧的にも彼のピアノと管弦楽の作品の集大成として、複雑困難にして華麗。彼自身友人への手紙で「この曲はかなり難しいため、練習を始めなければならない。年々指の動きがぶくなっていくので、老練さでカバーするつもりだ…」と書いているくらいだ。

カミーユ・サン=サーンス(1835~1921)は音楽の天才のみならず、古今を通してまれに見る博学多識な人物であった。演奏家としてはピアノとオルガンの名手、作曲家としては200曲以上の作品を残し、パリ音楽院の教授としてフォーレなどの後進を育て、音楽評論家として9冊の音楽書を発表し、文学者としては詩集や戯曲を発表し、哲学、天文学、旅行にも精通し、画家としてもすぐれた腕前をもっていた……！凡人にとってはもはや口をばかんと開けるしかない(そのせいで一生独身を通じたのかも……とやっかみの一つでも言いたくなっていくくらい)才能のオンパレードのような人間だった。

知性の塊りのようなサン=サーンスだが、作品はロマン主義を固持、リストの作風を支持し、知性と情熱と磨かれた技術が見事に調和した作品を多く残した。

チェロ協奏曲 第1番は、1873年、サン=サーンス38才の時の作で、当時演奏会で取り上げられた唯一と言ってもいい、シューマンのチェロ協奏曲と同じ調性、同じく1楽章形式で書き上げられているが、シューマンのと違って、次々変化する諸主題や自由に展開していく構成という点では、リストの交響詩に近いと言える。

だから、この曲はリストの後継者のひとりであるラフマニノフのお気に入りの曲で、この作品の魅力と美しさを賞賛していたというのも頷けるというものである。

サン=サーンス自身は、ベートーヴェンの田園交響曲の中の嵐の部分に触発されてこの曲を作ったと述べているが、この点を押さえて想像力を働かせて聴けば、フランス的な小粋なエレガンスさをこの曲に求めなくては行けないと力説している演奏家や音楽評論家の思い込みが、いかに見当違いであるかがわかるだろう。

サン=サーンスと同時代の大ヴァイオリニスト、サラサーテ(1844~1908)のおかげで、サン=サーンスは「序奏とロンドカプリチオーソ」(1870年)、「ヴァイオリン協奏曲 第3番」(1880年)と「ハバネラ」(1887年)の3つのヴァイオリンの名曲を世に残すことができた。

序奏とロンドカプリチオーソは本来ヴァイオリン協奏曲の終楽章とするために作曲されたものであるが、ヴァイオリンという楽器のありとあらゆる技巧が盛り込まれていることから生じる演奏効果の高さと多彩で変化に富んだ華麗な旋律は繰り返し聴いてもまったく飽きさせない名曲中の名曲である。

ヴァイオリン協奏曲 第3番はその10年後のサン=サーンス45才の最円熟期の作品で、美しい旋律がドイツ的なガッチリしたオーケストレーションと調和した稀有な傑作である。

—チェロ—

人生の転機はいつ訪れるのかわからないものである。私にとっては14才の時、たまたまテレビでカザルスが国連での演奏会の最後に弾いた「鳥の歌」を聴いたのが最大の転機となった。

94才のカザルスが演奏前に「私の故郷のカタロニアでは鳥はみんなピース！ピース！と鳴いている」と説明する時の震える声と高齢のためかほとんど音にならなかったチェロの音に深く胸を打たれ、それまでヴァイオリンを弾いていたのに、父にチェロを弾きたいと言ったら、次の日にさっそくチェロを買ってきてくれたから今日まで、チェロの魅力に取り憑かれつづけてきた。

そしてチェロのおかげで人生がどれほど潤いのあるものとなり、多くのすばらしい出会いに導いてくれたことか。

5年前知人の紹介で知る人ぞ知る半ば伝説的なヴァイオリン製作者の伏木三郎さんとお知り合いになったのもチェロの取り持つ縁からだった。

その頃彼は高齢の上、健康状態がかなり悪く、病気のご相談などで親しく往来しているうちにお互い意気投合し、ある時奥様のヴァイオリンの教え子たちの発表会でたまたまご持参された彼自作のチェロで「鳥の歌」を弾いたのがきっかけで「あなたのためにチェロを作りましょう」ということになり、ならば「チェロが出来たあかつきには、そのチェロを使って協奏曲を弾きましょう」と私が約束を交わしたことが今日の演奏会をすることになった直接のきっかけであった。

それから4年間、彼は入退院をくり返しながらも私のためにチェロを作りつづけ、1カ月前（2001年9月20日）に完成したのである。

友情によってチェロが生まれ、チェロによって、これからどんなご縁が広がるのか、いまからワクワクしている。



チェロの完成した日に

伏木三郎氏と

—ピアノ—

楽器にも運命もしくは自分の意志というものを持っているのだということをこのピアノによって、今でも日々実感させられている。

8年前知人の紹介でこのピアノと対面した時のことはいまでも忘れられない。主のいない何年も閉め切った部屋の中で厚いほこりを被って、このピアノはじっと耐えているように見えた。ただの粗大ゴミではないかというみんなの反対を押し切って家に引き取り、整理したり、調律したりするだけで日に日に音が出てきた。

わが家にきてから2年過ぎたある日、たまたま神戸へ出かけていた家内が地元の新聞にスタインウェイの修復に一生をかけている 礪田耕治さんという方の記事を見つけたご縁で、礪田さんにピアノのオーバーホールをお願いすることとなり、半年の予定で神戸の彼の工房へ送ったが、予定より大分早く完成して岡山に戻った2週間後に阪神大震災が起り、東灘区にある彼の工房が全壊、きわどい所でピアノが命拾いをしたことからこのピアノの持っている運命の力を感じるようになった。

その後このピアノがいきるようにとのことで、ピアノのために小ホールを作らされ、数々の一流のピアニストに弾かれる身分にのし上がり、そして今回、大ホールで皆様にラフマニノフの生きていた時代の最良のスタインウェイの音色を披露するまでになってしまった。

ピアノに踏み台にされ、すねを齧られるばかりの私ではあるが、このピアノが自分の行きたいようにこれからも手助けをし、そして次の世代へすばらしい状態で引き継がれていけるよう面倒を見ていくつもりである。

—— ヴァイオリン ——

久保陽子先生 賛

名ヴァイオリニストとしての久保先生のお名前を知ったのは30年以上前に遡るが直接演奏を聞いたり、親しく言葉を交わしたり、おつき合いをさせていただくようになったのは倉敷音楽祭がスタートし、倉敷で25年ぶりに岩崎 洗先生と再会し、仲間に入れてもらってワイワイやるようになってからだから10年来の交流ということになる。

最初は洗先生の演奏を聞くために倉敷に出かけていたのがいつの間にか、久保先生のヴァイオリンにも魅せられて行った。まずステージの袖からこれ以上ないくらいチャーミングな笑顔で現れた瞬間から聴衆は久保陽子の世界に引き込まれてしまう。そしてどの曲も力強く、情熱的、しかもツポにはまって、なによりも「久保節」とも言うべく超一流の音楽家のみが生み出せる独自の歌いまわしに私は眼を輝かし耳を澄まして聴き入ったものだった。

そしてヴァイオリンを手にしていない時の久保先生は、ステージの上の時以上に気さくで、思いやりにあふれて、そしてチャーミングだった。

その後も芸文館の音楽アカデミーなどで久保先生の音楽をさらに身近に接することができたが、3年前に父の若い時からの友人で、今や台湾の指折りの大企業家及び世界有数の芸術品のコレクターの許文龍氏の台南のお宅へ先生をご案内し、そこで先生の持参したご自身のガルネリウスと許氏所有のヴァイオリンコレクションの一部(!) (ストラディヴァリウス3本、ガルネリウス2本) の弾き比べを聴かせていただく幸運に恵まれたこと、そして昨年、劉生容記念館の竣工式の直後に、東京のソロリサイタルを終えられた先生が日本の製薬会社の社長が所有し、数年前から自由に演奏に使っていいよと貸してもらっているストラディヴァリウスをお祝いの演奏に持ってこられ、そのヴァイオリンがなんと父が若い時から毎日のようにレコードをかけ、そのレコードに合わせて、ヴァイオリンを弾いたミッシェル・エルマン所有のヴァイオリンだったという奇跡にめぐり合うことによって、久保先生は私には「巫女(みこ)」のように感じられてきた。

そもそも真の芸術家というものは、われわれ凡人にかわって日々身を裂くようなきびしい修練を通して、天からのメッセージをみんなに伝える仲介者でなければならないが、ある日、久保先生は一度もおっしゃらなかったが、30才から40才の演奏家として一生の一番大切な時期に義母の介護をずっとされていたことをたまたま新聞の記事で知ったことによって、先生は「巫女」以上に今や私にとって「観音様」のように思わず手を合わせたくなる存在となった。

そして今日「久保観音」は私達のためにご自分の楽器ガルネリ・デル・ジェスとエルマンのストラディヴァリウスを持参し、どの曲も名曲であるゆえに、1曲だけならともかく、これだけの曲数を恐らくどのヴァイオリニストも敬遠する今日の音楽からどのような天の啓示を引き出して下さるのか、いや、それよりも、いま現在この場に居合わせられた幸運をお互いに喜び合うだけで精一杯ではあるまいか。